

フォースターとワーグナー音楽
——『ロンゲスト・ジャーニー』における
「本当の自分」——

ドライデン いづみ

はじめに

英国ケンブリッジ大学のキングズ・コレッジの敷地内では牛が飼育されている。その光景はポストカードとしても街角で売られている。なぜそこに牛は存在しているのか。確かに、その牛を見る者にとっては牛はそこに存在していると映る。また、そこに存在するものだと思っている。では、どのようにすればその牛は存在しなくなるのか。それは、ごく簡単である。見る者が目を閉じればよい。或いは、牛がそこに存在するという事実を認めなければよい。認めるか、認めないか。認められれば存在でき、認められなければ存在できないということになる。即ち、他を認め、他に認められることで存在は成り立つ。しかし、この牛を「本当の自分」に置き換えてみたらどうか。「本当の自分」に対して目を閉じることができるのか、或いは「本当の自分」は存在しないという振りをすることは可能なのか。

E. M. フォースター¹の小説『ロンゲスト・ジャーニー』²は牛の存在如何で始まる。主人公リッキー・エリオットは自らの子供を失い、妻と疎遠になり、そして最終的に機能しない脚とともに自分の肉体を失うことではじめて他の人間の中に「本当の自分」を生かすことができる。それは、生涯結婚せず、また子を持ってなかったフォースターが唯一活字の中に託した希望であったといえる。ケンブリッジからポストカードを受け取る者は、その表面に豆粒さながらにも牛の姿を確認することができるであろう。しかし、「本当の自分」はどのように確認すればよいのか。フォースターはその方法をワーグナーのオペラの中に探っていたのである。フォースターはワーグナーの音楽は自分を行きたい方向へと導いてくれる存在であると確信していた。フォースターにとって音楽は自分を導く上でとてつもなく大きな役割を担っていた。その要素はこの小説『ロンゲスト・ジャーニー』におけるワーグナーのオペラの引用に言及することができる。

ペンギン版の『ロンゲスト・ジャーニー』の編集者であるエリザベス・ヘイン (Elizabeth Heine) は、この小説を解説するにあたって、次のように述べている。「『ロンゲスト・ジャーニー』においては、フォースターは現実性と個人的概念の関係について考えるとき、ギリシャ劇のパターンやキリスト教、そしてワーグナーの神話を使用している」(Forster, *Longest* vii)。フォースターの他の小説とこの小説を併用して考察すると、オペラの要素はフォースターの小説全体において重要な役割を果たしていると理解できる。英国の音楽家ベンジャミン・ブリテン³は、「フォースターの小説の構

1 E. M. フォースター (Edward Morgan Forster, 1879–1970) : 英国の作家

2 『ロンゲスト・ジャーニー』(The Longest Journey, 1907) はフォースターの二番目の小説

3 ベンジャミン・ブリテン (Edward Benjamin Britten, 1913–1976) は、20世紀を代表するイギリスの作曲家である。フォースターはブリテンとともにオペラ『ペリー・バッド』を制作するに至った。

造はオペラに類似している」(Borrello, 144) と述べている。そして、このワーグナーのオペラこそ、フォースターに人間の存在理由について考えざるを得ない状況を与えたという結論に導かれる。

拙論では、フォースターに影響を与えたワーグナーの音楽の本質を言及しながら、同時にフォースターの小説『ロンゲスト・ジャーニー』における「存在」のテーマについて追求していきたい。なぜフォースターはワーグナーのオペラに魅了され、そのテーマに固執したのか。この小説に幾度となく繰り返される「存在」のテーマを考察することで、フォースター文学の意図を理解したい。

1. 人間は神にはなれない

ここで、フォースターに人間の存在理由について考察せざるを得ない影響を与えたワーグナーの音楽とは一体どのような音楽なのか考察する必要がある。この小説で主に使用されているオペラは『ニーベルングの指環』である。このオペラについて高橋康也と高橋宣也は次のように解説している。

リヒャルト・ワーグナー（1813-83）の舞台祝典劇『ニーベルングの指環』は1876年8月13日から17日にかけて第一回バイロイト音楽祭で初演された。音楽にしてほぼ15時間を要するこの超大作は『ラインの黄金』と題された前夜祭から第1日『ワルキューレ』、第2日『ジークフリート』第3日『神々の黄昏』と4日間にわたって続く。バイロイト祝祭劇場がそのために建てられた。この舞台祝典劇は文字通りワーグナー畢生の大作であり、作曲家はここでは、同時に詩人であり、劇作家であり、思想家である。『ニーベルングの指環』は、聴かれる前にまず読まれなければならない音楽なのだ。——川底に眠る黄金を

守るラインの乙女たち。乙女に憧れて川底を訪れた小人族のアルベリヒ。醜いアルベリヒをからかう乙女たちはしかし黄金の秘密をうっかり漏らしてしまう。黄金からつくられた指環を持つ者は無限の力を手にすることができるというのだ。ただし、指環をつくることができるのは愛を断念した者のみ。だが、アルベリヒは乙女たちへの思いを断ち切り、指環をつくりだしてしまう。この指環こそ、神々と人間をめぐるすべての悲劇の始まりだった。——詩の背後から官能的な音楽がひびきはじめていま、『ラインの黄金』が始まる（ワーグナー、『ラインの黄金』カバー内側頁）。

この物語は「一筋の川が流れている」という一行から始まる。頻繁に川は人生に喩えられるが、フォスターもまた小説『ロンゲスト・ジャーニー』の中で人生を川の泡に置き換えて、主人公リッキーに次のように考えさせている——「彼は自然の残酷さを前よりもはっきりと感じとった。自然にとってはわれわれの上品な人格や敬虔な姿勢など、濁った水に乗って下流へとどんどん流れていく泡にすぎない。泡は砕け、流れは続いていく。……スティーヴンは子供を作るだろう。流れに貢献するのはリッキーではなく、彼スティーヴンの方。スティーヴンは、はるか未来の子孫を通じて、未知の海と混じりあうかもしれないのだ」（フォスター、88）。これは、リッキーが自らの子供を失った時に抱いた思いである。スティーヴンはリッキーの異父弟である。彼はリッキーとは全く正反対の性格を持ち合わせている。リッキーはスティーヴンと自分に関する真実が明らかになった時にはショックを隠しきれないが、やがてその真実を是正的に正面から受けとめようと決心する。

「フォスターが述べるとおりスティーヴンはジークフリートである」（Forster, *Longest* xiii）とヘインは『ロンゲスト・ジャーニー』の解説の中で述べているが、ジークフリートはこのオペラ『ニーベルングの指環』に

登場する「人間族（ヴェルズング族）の英雄」（ワーグナー、『神々の黄昏』5）である。高橋康也はこの物語について次のように説明している。

しかしジークフリートの変身と変心は、劇的効果のみにかかわっているのではなく、より大きな問題の一部である。その問題を仮に、愛の問題としてみよう。「世界を動かすものは愛である」——これはワーグナーにとって根本的な信念だった。……ワーグナーはしかし「本気」だった。……一八五三年刊の完成初版本『ニーベルングの指環』では、そのあとでおおよそ次のように語っている。

いかなる黄金も、神の栄光も、館も宮廷も、偽りに満ちた契約も、
因習のかたくなな掟も、もう無用。喜びにつけても悲しみにつけても、
あらまほしきはただ愛だけ。

愛の至上の力をことほいだこの詞章は、しかし作曲されなかった。その理由はワーグナー自身が愛についてのこの楽観論に納得できなくなったからだ。……

……所有することの諸悪から、いっさいを救う愛へ。……私は（残念なことには！）その愛なるものがいかなる性質のものかをここで明示しそこなってしまったのです。これまでの『指環』の物語の展開において、愛というものの根本的に破壊的な姿をたっぷり見えてきたはずなのに。（ワーグナー、『神々の黄昏』191-193）

果してワーグナーの信念や愛についての考え方は何に基づいているのか。パトリック・カヴァノーはワーグナーについて、「少年の頃、教会の十字架像を『見ては切ないほどの憧れに身を沈めた』り、『救世主に代わって十字架に架かりたいと我を忘れるほどの感動で思い焦がれていた』（カヴァノー、124）と説明している。また、カヴァノーは、ワーグナーのこのキリストへの信仰心について、「イエス・キリストを『すべてを愛する救

い主』と呼び、『人間のために苦しみを受けて死ぬためにお生まれになり、ご自分の血をもって人類を救う』お方だとしている」(126)と述べている。

ワーグナーのこの信仰心はフォースターにも音楽とともに影響を及ぼすこととなり、その要素はこの『ロンゲスト・ジャーニー』のリックイーに受け継がれていると考えられる。リックイーはキリストを思わせる。人のために自分自身を犠牲にしようとするからである。他人を救うために、リックイーは自分の身をも厭わずに投げ出す。しかし、それが常に成功するとは限らない。その点においては、誰もキリスト以上にはなれない、つまり神にはなれないことを物語っている。そして、確かに誰しも完全なる人間ではないということをこの小説は暗示している。リックイーは肉体的に欠陥があり、リックイーの親友であるアンセルは天才的な要素を持ちながらも、就きたい職に就く事はできない。リックイーと結婚したアグネスはかつての恋人であるジェラルドの死後、女神的な要素を失い金銭に固執する。ミセス・フェイリングはすべてを破壊しようとして行動してしまう。スティーヴンは、哲学的でありながらも、理性に欠けている。全登場人物は何か欠点を持ち合わせながら人生を歩んでいる。そして、それらの欠点が唯一人間としてこの世に生きている証として彼らをこの世につなぎ止めているのである。

しかし、最終的にリックイーは唯一の欠点である「機能しない脚」をスティーヴンを救うために失うことになる。と同時に、彼は自分自身の命をも失うことになるのである。このことによって、スティーヴンを通じてリックイーの祖先から子孫は継続されることとなる。なぜならば、リックイーは自らの子供を失い、妻であるアグネスをもはや理解できず、そして彼には未来への希望は何も残っていなかったからである。しかし、自分を犠牲にして異父弟であるスティーヴンを列車がやってくる線路上で救済したことは、自らの子孫を救済したこともつながることになる。リックイーは自らの欠点を失うことにより、本来の願望を達成したことになる。フォースターはこの自己犠牲の意味を我々に問いかけている。と同時に、人間らしさ

とはどのような状態のことを言うのかということ、この物語を通じて我々に再考させるのである。カヴァノーは、「ワーグナーは、キリストの血は『憐れみの心の源泉であり、人間なら誰にも流れている』と書き、次のように結んでいる。この世で唯一希望が持てるのは、本物のキリスト教の聖礼典であり『キリストの血に加わることだ』」（カヴァノー、127）。リッキーは、自分を犠牲にすることで「機能しない脚」からの自由を得、子孫を得、そして「キリストの血に加わ」ったのである。それまで、リッキーは本当の意味で自分の人生を生きていなかったのである。最終的にリッキーは川の流れに浮かぶ泡となってこの世から消えたのではなく、音楽の流れとなって未来の人間の中に旋律となって永遠にこの世に響くことを選択したのである。

2. 二つの環

小説『ロングスト・ジャーニー』は、指環ではなく二つの環が象徴的に登場する。それは、「リングズ」として物語の中で繰り返し登場するが、正式には「キヤドベリー・リングズ」と呼ばれる。この二つの環は二重に掘られた円形の塹壕である。実際には、フィグズベリー・リングという場所がイギリスのウィルトシャーにある。フォースターはここを訪れ、気に入っていた。そして、この小説の発想をその二つの環から得たのである。しかし、これら二つの環は何を示唆しているのか。物語においてリッキーは「リングズ」を訪れる。リングズを訪れるまではリッキーは世界に目的と価値とを見出し、人並みの人生を送っていた。アグネスと結婚し、幸せな日々を過ごしていた。また、アグネスを愛し、すばらしい人間だと思い、そして人間世界に光を与える存在だと確信していたのである。

しかし、すべては「リングズ」の下に狂いだす。突然二つの歯車は反対方向に回転し始めたのである。それは、リッキーの伯母であるミセス・フ

エイリングと関わることになった時から始まるのである。ミセス・フェイリングはその名（「失敗」を意味する）が示唆するとおり、すべてを台無しにすることを人生の楽しみとしている。そして、リッキーとアグネスの結婚生活をも失敗へと導いていくのである。一人の人間が他の人間に与える影響は果てしなく大きいことは言うまでもない。リッキーとアグネスは何とかミセス・フェイリングとの状況を改善しようと努めるが、結局自分達の身の破滅を導くに至る。そして、ミセス・フェイリングは人を陥れることを人生の目的とすることで自らの生の証をするのである。彼女の影響下にある人物達は、順調に歩んでいた人生を再考するに至り、それまでとは全く逆の人生を歩む方向へと導かれてしまう。

「リングズ」に遭遇して以来、歯車が逆回転し始めたリッキーは、アグネスという実在について疑問を持ち始める。また、それまで女神的な存在であったアグネスはミセス・フェイリングの影響を受けて金銭へと執着し始めるのである。つまり、二つ同時に同じ方向に回転していた環は、ミセス・フェイリングとの関わりによって逆方向に回転し始め、そしてリッキーとアグネスという二つの環は、もはや同じ方向へは回転しなくなってしまったのである。ここで、「本当」であると思っていたことは、疑問を持たざるを得ない実在へと変貌し、登場人物の視点を変化させていく。リッキーは自分が正しいと思うこと、即ちスティーヴンに事実である「本当の事」を言うことの必要性に悩まされる。一時はアグネスにその行動に歯止めをかけられるが、その後そのようなアグネスの行動に疑問を持ち始める。そして、自分が正しいと思う事、即ち真実であるスティーヴンが自分と血がつながった兄弟であるということのスティーヴンに告げる事を決心する。真実を見ない振りをすること、あるいは真実を知らない振りをすることは非常に堪え難いことであるからだ。

リッキーはスティーヴンとつながりを持つ事を決心する時点で、アグネスとのつながりを断つこととなる。ここでは、兄弟愛の方が男女の愛、つ

まり夫婦間の愛情よりも重要性を持ち始める。それは、リッキーはアグネスとの子供を失ったからであり、自分には将来子供を残すことなど不可能であると悟っているからである。つまり、リッキーは子供を失った時点でアグネスとのつながりの意味を見失ってしまった。と同時に、アグネスをも見失ってしまった。そして、無意識ながらも、リッキーは希望をスティーヴンに見出すこととなる。二つの環の中で、リッキーとアグネスとの関係に歪みができてしまった。一旦形成された歪みをもとの状態に修復することは不可能である。この環の中における歪みは、ヘンリー・ジェイムズの小説『黄金の杯』を彷彿とさせるものがある。

「スティーヴンを救うことは自らの子供を救うことである」とリッキーの潜在意識と魂はリッキー自身に語りかけていたのである。何度も線路で子供が列車に轢かれたというニュースがリッキーの耳に持ち込まれるが、無意識のうちにリッキーはスティーヴンを線路で救うことによって、最終的には子供を救うことになるのである。二つの環にはこの事件によって二つ目の切り込みが入り、リッキーがスティーヴンを救った時点から二つの平行線へと形が変化する。リッキーは未来へと続くレールを二つの環からつくりあげたのである。オペラ『ニーベルングの指環』に登場する黄金の指環は愛を断念した者だけにつくるチャンスが与えられる。リッキーは最後まで愛をあきらめなかった。その愛はもはや異性に対する愛ではなく、人類という普遍的な存在への愛である。リッキーはすべてを失っても、愛に未だ希望を見出していたのである。リッキーには生きながらにして無限の力は与えられなかったが、他を救うことで、子供を救うことでそれは与えられることとなるのである。

ここで、子供を救うというリッキーの存在について考察してみたい。リッキーが求めていたものは、希望ある子供であった。しかし、それは生存中は与えられなかった。しかし、自己を犠牲として一人の人間を救った時、それはリッキーに与えられることとなった。そして、リッキーは自分とは

正反対の性格の弟を精神的に受け入れることでその願望が叶ったのである。また、スティーヴンは結婚できる女性を求めている。そして、リッキーに列車事故で救われることによってその願望を実現する機会が与えられる。リッキーは線路上でなりたかった「本当の自分」、即ち健康な肉体を持った自分自身に変身したのである。そして、それ以降人生を歩むスティーヴンはリッキーの要素を徐々に受け継いでいくこととなる。換言すれば、線路という二本のレール上で二人の異なる人間は一つに結合されたといえる。つまり、「リングズ」の環は、円形から平行する二本の線へと変化し、新しい人生を歩む一人の人間に生まれ変わるのである。ここに、フォスターが子供を自らの小説において繰り返し登場させる意味がある。

フォスターは自分自身の状況と子供の誕生を重ね合わせることで、常に新しい人間に生まれ変わることを期待していたのである。また、現実には不可能な子供を持つという行為を、小説において実現させていたのである。神はフォスターに自らの子供を与えなかったが、代りに文字によってそれを可能にさせた。フォスターは、実際常に子供の未来について考えていた。フォスター自身、そのことについて『コモンプレイス・ブック』に記しているが、アビンジャーの小学校の子供達に励まされることでますますそのことについて考えを深めていった。また自分と同性愛関係にあったボブ・バッキンガムの子供達の世話をしながら、何が未来の子供達にとって、また未来の人間にとって必要なかを考えざるを得なかったようである。晩年には、フォスターはボブの妻メイと信頼関係を築き上げ、二人は親友となった。そして、ボブとメイの子供のうち一人がこの世を去ったとき、リッキーがジェラルドを失ったアグネスを慰めたように、フォスターはメイとともに互いを慰めあった。フォスターは、自分自身が死を迎えるまで常にこの世における生と死の意味について考えていたに違いない。そして、自分自身を通じて未だ生を保持している祖先の存在を認識せずにはいられなかったのである。

3. 求めなさい。そうすれば……

オペラではすべてをスローモーションにすることで「考える」時間を与える。振り返る時間のない現実をスローに再現する役割を担っている。『ロンゲスト・ジャーニー』における主人公リッキーの変容する姿は物語において急速に展開されるため目に余るものがある。その理由は、リッキーが経験不足だからである。リッキーは人生において生きていないのだ。自分が存在したい理由もわからない。しかし、人間の領域において一つのことには正しい判断など可能なはずはない。即ち、人間が正しい判断などできるわけがないから、それ故神が存在して芸術や多種多様なものの中から語りかけ、問いかけるのである。

この小説『ロンゲスト・ジャーニー』は、急速に展開しつつも、登場人物リッキーを通じて周囲の人間の心理や行動を言及することで時間が経過したのかどうかを一瞬疑わせる。しかし、人生を生きていなかったリッキーが示唆するものは、我々の中に潜む「存在したくない自分」である。我々は自分の欠点を認めたくはないが、同時にその欠点を自分自身の中に存在させたくはない。可能な限り、自分自身、即ち「本当の自分」でありたいと願っている。しかし、人生においてそれは通常不可能であることが多い。我々は人生において自分を偽らなければならない状況に翻弄される。その時に、はっと目を覚まさせてくれるのは無垢なる子供である。子供の死ほど残酷なものはない。それは、我々に内在している無垢なる存在の死をも暗示させる。

リッキーが求めていたものは何か。また、何を求めたかったのか。何を手にいれたかったのか。しかし、彼は完全な形でそれを手にいれたのである。つまり、「生命」を手にいれたのだ。それは、即ち「永遠の命」である。リッキーは自分の死を選ぶことで、新しい命を手に入れたことになる。そして、リッキーは子供を残すことができないフォースター自身であった。

フォスターはその自分自身であるリッキーをこの物語において消滅させることで、生まれ変わりを欲したかったのである。つまり、子供を残すことのできるスティーヴンになりたかったのであるが、前立腺を手術しなければならなかったフォスターが自分自身の真実を知ったとき、つまり「本当の自分」を受け入れなければならなかった時、残された道は文字のみであった。文字はフォスターにとって、不可能を可能にする魔法のようなものであった。

おわりに

タイム誌の2006年の「今年の人」(「パーソン・オブ・ザ・イヤー」)は、「あなた」(You)である。これは、インターネット時代を反映して誰もが主演になれることを暗示しているためであるが、人間にとってすべてが可能となってきたことを示唆していることは言うまでもない。また、インターネット上で自らの情報をホームページに掲載することで、他人に自分を知ってもらおうということに喜びを見出しているためである。しかし、すべてが可能であるかに思われる世の中であるが、人間は救われていない。毎日悩み、解決法を求めている。そして、苦難の時には自分自身のこの世における存在意義について考えざるを得なくなってしまう。そのために、インターネット上に自らのホームページを作成して自分の存在を誰かに認めってもらうのである。

それでは、存在するというとはどういうことか。他を認め、他に認められることと前述したが、存在するにはまず生きなければならない。この世に生を持たなければならない。そして、生きるということとは何かを求めるということでもある。ワーグナーは常にキリストを求めていた。それは、フォスターに何らかの形で影響を与えたに違いない。そのため、フォスターの小説は悲劇的な要素を醸し出しつつも、完全に悲劇にはならない。

なぜならば、そこには救いがあるからであり、その救いは自分自身の先祖から学んだ生きる知恵である。フォースターは常に希望を求めている。そして、それは子供の中に見出されたのである。

『ロンゲスト・ジャーニー』は人生において「本当の自分」を見つける旅のことを示唆しているが、類似した小説として夏目漱石の『草枕』が思い出される。漱石は小説『草枕』において、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」(夏目、3)と述べる。しかし一方で、「住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き抜いて、難有い世界をまのあたりに写すのが詩である、画である。あるは音楽と彫刻である」(4)とも述べている。ここには、芸術の中に希望を見出す漱石の姿がある。「『草枕』は旅の枕言葉であるが、ここでは旅の意味で使われ、「歌の旅」、「旅寝」などの意味が込められており」(461)、人生における苦難の解決方法として芸術が引き合いに出されている。一方、「草枕」の文字通り草を枕にして星を、空を見上げれば、自分の存在について何かを考えざるを得ない。大地と一体になってこの世を眺めるのである——リッキーが「リングズ」で眺めたように、またスティーヴンが屋根の上で寝転がって空を見上げたように。千円札も漱石から野口英世に変わり、お札もアメリカナイズされてきた日本であるが、裏の富士山の天辺から覗く野口の左目はあの世からこの世を覗いている漱石の目ではないかと思わずにはいられない。富士の天辺に寝転がってまっすぐに空を仰ぐとき、まっすぐに空と向き合うとき、我々もこの世の何がしかが理解できるのかも知れない。

人間には何らかの方法で救いが与えられている。それは、気づかないことも多いが、我々がこの世に生を受けたのは救われているということを前提とする希望を発見するためでもある。この小説『ロンゲスト・ジャーニー』のタイトルでもある「いと長き旅路」は、我々が希望を持ち続ける限り果てしなく続いていく。リッキーの旅路はスティーヴンの子供によって、

子孫によって未だ続いている。また、果てしなく続いていくことだろう——毎年12月になるとキリストの誕生物語が続けられているように。すばらしい音楽を何度も聴きたい衝動に駆られるように、生命の誕生のニュースや物語は何時間聞いてもいいものである。そこには再び無垢な状態へと戻ることのできる我々の姿と希望とが約束されているからである。

引証資料

Borrello, Alfred. *An Annotated Bibliography of Secondary Materials*. The Scarecrow Press, 1973.

Forster, Edward Morgan. *Commonplace Book*. 1978. Philip Gardner, ed. Stanford University Press, 1985.

———. *The Longest Journey*. 1907. Elizabeth Heine, ed. Penguin Books, 2001.

Stape, J. H., ed. *E. M. Forster: Critical Assessments Volume I*. Helm Information, n.d.

Stone, Wilfred. *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster*. Stanford University Press, 1967.

パトリック・カヴァノー. 『大作曲家の信仰と音楽』 吉田幸弘訳 教文館, 2000.

夏目漱石. 『草枕』 「漱石全集第三巻」 岩波書店, 1994.

E. M. フォースター. 『果てしなき旅 (上)』 高橋和久訳 岩波書店, 1995.

———. 『果てしなき旅 (下)』 高橋和久訳 岩波書店, 1995.

リヒャルト・ワーグナー. 『ニーベルングの指環：神々の黄昏』 高橋康也・高橋宣也訳 新書館, 1998.

———. 『ニーベルングの指環：ラインの黄金』 高橋康也・高橋宣也訳 新書館, 1999.